

## 寒川町立小谷小学校

研究テーマ：「自ら課題解決に取り組む子どもを目指して～実生活につながる算数の授業づくり～」

### 1 実践の目的

本校では令和2年度から、算数科で「学び合いを通して、共に学ぶ良さを実感できる授業づくり」の研究に取り組んでいる。昨年度までは「問いが生まれる」をキーワードに、子どもの中から問いが出てくることを意識し、これまでの学習をもとに意欲的に課題解決に取り組む子どもの育成を目指した研究を行っていた。今年度は、昨年度に引き続き「問いがつながる」授業づくりや、1年から6年までの系統性を大切にしながら、さらに子どもが算数の学びを通して、学んだことが実生活につながっていることを実感できるような授業づくりを研究していく。

### 2 実践の内容

#### (1) 校内研究授業

##### ①1 学期

◆6年「データの見方」

##### ②2 学期

◆2年「長さ」

◆3年生「重さ」

◆4年「くらべ方」

##### ③3 学期

◆1年「大きな数」

◆5年「単位量あたりの大きさ、割合」

#### (2) 研究協議の内容

##### 6年生

- ・ 児童がデータの内容が、自分たちのリレーの結果だとわかってから学習を始めたので、主体的に取り組むことができた。
- ・ 課題設定が主体的な学びに結びついている。実生活につなげながら算数の学習ができた。隙間で既習事項の確認があったのが良かった。安心して意見を伝え合え

る土台づくりができており、クラスの雰囲気が良い。6年生で助け船が出せるのはすごい。今までの積み重ねが伝わる。

##### 2年生

- ・ 正三角形と長方形の周りの長さはどちらが長いかが、見た目では分からないので、児童が「図ってみたい。」という意識がわくような工夫がよかった。
- ・ 児童の意見から長さを一回（一カ所）測っただけでは分からない長さでも、計算をすることで求められるということが共有できたのがよかった。

##### 3年生

- ・ 身近なものを使って1kgを目指して量ろうという課題設定がよかった。
- ・ 導入で前時までに学習した身近なもので1gがどれくらいかということを確認した後活動に取り組み、前時までの学習を手掛かりにすることができた。
- ・ 物によって同じ1kgでも感じ方が違うことにも気付ける活動だった。

(3) 横浜国立大学池田敏和先生の講演（指導、講評）より

#### 「実生活につながる算数の授業づくり ～長さと重さ～」

数学化の基本的な考え方は「別の世界に置き換えてモデルを作って考えることは、人間の自然な思考様式である。」

日常(問題)

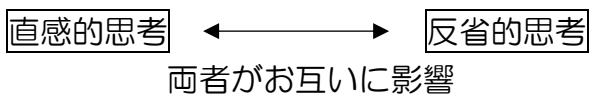
数学(モデル)

置き換え

モデルの役割：思考の場・思考しやすい場面が別の世界にはある。

2年生の授業では、導入において直感で答えさせていたのがよかった。直感（こうなるんじゃないかな）という曖昧さのあるも

のだからこそ「はっきりさせたい」(本当にそうなの?実際にはかかってたしかめたい。)という感情が生まれる。



また、誤答を取り上げることで、確かめる必然性が生まれる。既習事項を皆が覚えているわけではないので、教科書やノートを見返し、進みながら戻る活動も大切である。

3年生の授業では、探す→選ぶ→試すの解決の見通しを立てる思考があった。一つの方法がうまくいかなかったときに、別の方法はないか考え、いくつか方法が見つかったらその中から一番よい物を選び、試していくという活動を通して、体験が経験へと変わり、学びが深まっていく。

### 3 実践の成果と課題

#### (1) 児童の成果

- ・身近なことから問題に取り組むことにより、算数の場面を考えやすくなり、より主体的に学習に取り組むことができた。そして日常生活と算数の場面が乖離することなく学習に向かえた。
- ・課題に取り組む際に、「その言葉は最近習ったな」や「前に習ったことが使えないかな?」と学びの確認として積極的にノートを活用する姿が見られた。ノート指導を毎年積み上げてきた成果だと感じた。
- ・学習のふり返りにより、学びが生活のどの場面で活かせるのかをイメージでき、活かしていこうとする意欲を高く保っていた。さらに、他教科で学習しているときも「前に算数でやったやつと同じだ。」と発言する姿も見られた。
- ・児童向けアンケート結果では、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていますか」への肯定的な回答が、1学期の90%から学年末の95%に上がった。児童の学

びを促す実践が、自己肯定感や教員への信頼につながっていると感じられた。

#### (2) 教員の成果

- ・教科書の内容にとらわれずに、児童の実態に合わせて日常生活の中から課題を見つけ、それを教材とすることができた。
- ・单元ごとに学習のふり返しをすることで、今回の学びが生活のどの場面で活かせるのかを想像し、活かしていこうとする意識が高まった。

#### (3) 教員の課題

- ・学年の児童の実態に応じた理解しやすく、考えたくなるような教材設定を大切にしていこう。学習課題とは、目的を果たすために児童自身が考えなくてはならないこと、しなくてはならないことと捉えている。その「課題」に取り組む中で新しい考え方や知識にも気付かせたい。算数が日常生活からの課題の道具として使用できるかどうかを吟味し、授業を構成することを大切にしていこう。
- ・数理的処理の場面で学習に困り感を抱えている児童はあきらめてしまうことがあるので、引き続き朝のモジュール学習の取組等を活用して、個々の既習事項の定着を図っていこう。
- ・指導要領の目標と照らし合わせた上での单元計画を(教科横断も視野に入れて)作り上げていこう。

### 4 今後の展開

今年度は、サブテーマを変更して新たな視点で研究に取り組んできたが、低学年の具体物の操作の大切さと、高学年になるにつれて抽象化していかなければならない難しさを改めて感じた。来年度も、教職員で研究に対する共通理解を図り、研究授業と研究協議を重ねて、実りある1年となるようにしていきたい。